存在自体がチートな人間にチートな能力を与えるとどうなるのか

元号四年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
存在自体がチートな人間にチートな能力を与えるとどうなるのか

【Ｎコード】
Ｎ１２９３Ｖ

【作者名】
元号四年

【あらすじ】
タイトルからも分かるとおり、そのときのノリとテンションだけで書いていくタイプのものです。存在自体がチートな高校生、星野龍馬にチートを通り越してもはや外道と呼べるような能力を与えたらどうなるのか。そんなことをテーマにやっていこうと思います。

迷ったらとりあえず進め

星野龍馬、十七歳。五月生まれのＡＢ型で、市内の高校に通う一般的な高校生。

……ではなく。

テストの全国模試では常に一位。所属している部活ではインターハイでＭＶＰを取り、風紀委員長として学校中に名を馳せる傍ら、生徒会長としての一面も持ち、模範的な生徒から不良と呼ばれる生徒にまで慕われ、バレンタインには通りすがりのＯＬにまでチョコを貰う始末。

そんな俺のことを、人々はこう呼ぶ。

存在自体がチートな超人、と。

そんなこんなで、俺は異世界に飛ばされる事になった。詳細は不明。気がついたらよく分からない空間にいて、神様を自称する小林とかいうおっさんに『ゴミを木に変える力』を始めとする数多くの能力と、二番目に偉い神様を自称する犬飼とか言う若い男の人が『空想を現実に変える力』というものをくれた。これがあれば何でも出来るらしいが、彼らの言葉を理解するのに軽く三十分近い時間を要した。

そんで異世界に飛ばされて数時間。俺は途方に暮れていた。

回想終了。

ところで、今更になってなんだけどあの人たちに聞きたい事があるんだ。優先順位としては明日の昼ごはんより重要。わかりにくい人は、モンハンをやってるときに火竜の紅玉が欲しいんだけど、捕獲するにしても討伐するにしても面倒くささは変わらない。そんな状況を考えて欲しい。

「これから、どうすればいいんだぁあああああっ！！！」

目的が一切ありません。

異世界に飛ばされた。それ自体は別にいい。問題は、何も目的が無いという部分だ。

あの神様たちは目的どころか俺をこの世界に飛ばした理由すらも教えてくれなかった。いくら俺の頭が良くてもこんな異常事態に対応できるだけの柔軟さは持ち合わせていない。

とりあえず持ち物の確認。えっと、ケータイ（電波が届いてない）、サイフ（所持金３６０円）、ハンカチ（綿とポリエステルの合成素材）、リストバンド（二日前に買った）。

持ってきたバッグの中に入っているのは、ＰＳＰ（モンハン）とタオル、バッシュ、ボール、お守り、マグネットの将棋、ＵＮＯ、遊戯王カード、デュエマ、弁当箱ｅｔｃ．．．

（使えるものが殆どねえ……）

まさかの使えないものシリーズにがっかりする。もう少し何かあってもいいんじゃないかと思うが、残念ながら俺は必要最低限のものしか持ち歩かないタイプの人間だった。

「せめて何かもう少しマシなものは……お？」

根気よくバッグを漁っていると、なにやら入れた覚えの無い封筒が入っていた。その封を破り、中から紙を取り出す。

『好きです。付き合ってください』

「期待させんなや！！」

俺はその手紙を封筒ごと破り捨てる。くそっ！　少しぐらいまともなものは無いのか！

そう考えながら再びバッグ漁りを始めると、後ろの方で何やら「ズンッ」という、まるで大きな生き物が地面を踏んだような音がした。

間接の錆びた人形のような動きでゆっくりと振り返る。するとそこには――

「ギィオオオオオオオオンッ！！！」

なにやら羽の生えたドラゴンのようなものが立っておりましたｗｗ。

「って嘘だろ！？」

笑ってる場合じゃねえ！　熊ぐらいなら素手で倒せる自信はあるけどさすがにドラゴンは無理だ！

こういう時はどうすればいいか。決まってる。三十六計逃げるにしかず。

（こういうときはあのおっさんがくれた能力で！　えっと、どれだ！？）

かなりテンぱりながらもおっさんの言っていたことを思い出す。くそ！　なんでちゃんと説明聞いておかなかったんだ俺のバカ！

「ええい！　だったらあの『空想を現実に変える力』を使うまでだ！」

俺は頭の中で《聖剣エクスカリバー》を想像し、それをなんとなく物質化させる。すると、俺の手の中に白く輝く黄金の装飾が施された剣が現れた。俺の頭が考えたスペックどおりならこれでいけるはず。

「切り裂け！」

俺は気合を溜めながら剣を振るう。すると、剣がいきなり１０メートル以上も伸び、羽ばたいて向かってくるドラゴンを一刀両断した。

さて、ここで問題です。生き物を真っ二つにするとどうなるでしょうか。

俺もバイオハザードとかをやっていて、多少はグロいものにも耐

性があると思っていた。魚をさばくのも慣れているから大したことは無いと。

けど、それは慢心だった。実際、零れ落ちてくる臓器を見てしまった俺の頭は一瞬フリーズし、次には、

「……ぅ……ぅぉえええええええっ」

開始百行にも満たずに主人公がゲロるという不衛生極まりない状態に。

ゴソゴソゴソ……。しばらくお待ちください。

「あっぶねぇ……薬常備しといてよかった……」

それから数分。俺は『ゴミを木に変える力』を使ってドラゴンを処分した後（なんか御神木クラスのサイズになった）、とりあえず東に向かって歩を進める事にした。川か海に出れば、そこから街に辿り着くだろうというＲＰＧ的な発想からだが、これが意外と役に立つ。

けど、歩けど進めど街には着かず、いい加減面倒くさくなってきたところで俺は一つの方法を思いついた。

（空想を現実に変える力で能力作り出したらいいんじゃね？）

はっきり言って、これは名案だと思った。

早速能力作りに着手する。けど、なるべく行き過ぎない程度に。

（まずは空間転移系の能力がいいよな。色々と役に立つし、上手く使えば攻撃にも防御にも使えるだろうし）
「おい、そこのお前」
（そしたら次は具現化系の能力だな。幸い遊戯王カードとかデュエマとかあるし、一から作り出す必要もないだろうし）
「聞いてんのか？　おい」
（サイコキネシスとかもいいよな。念じただけで物動かすとか、ちょっと憧れてたんだよな）
「……」

意外と考えがまとまるのも早く、トントン拍子に作業が進んでいく。あーあ、こんなことなら東大なんて目指さずにゲームクリエイター目指しとけばよかった――

「ふん」

ゴキッ

「くぺっ」

あれ？　突然世界が横になったぞ？　何が起きた？

なんか傾いている首を無理矢理戻して周りを見る。すると、俺の周り３６０度余すところなく、なんか騎士団みたいな人達が勢ぞろいしてた。

……全員、俺に向かって剣やら槍やら斧やら構えた状態で。

「……は？」

え、何このＦＦ？の帝国軍に追われたフリオニールたちみたいな状況。ゲームと違うのは、今の俺に頼れる人間なんて一人もいなくて、俺の周りの騎士団の方々は軽く五十人を超えている事だが。

「お前、一体何者だ？」

「えっと……」

失礼ですが、あなた方は誰ですか？　なんて口が裂けてもいえない。理由？　自分に向けて殺気放ってる人間とどうやって対話しろって言うんだよ。こちとら丸腰だぞ。

俺の目の前に出てきて圧倒的な殺気を放ちながら俺を見下ろしているのは、真っ白な鎧に身を包んだ二十代前半の男。体格はいいが、俺より身長は低い（俺は身長が１９２ｃｍある）。

まあ、俺を相手に五十人程度で殺り合おうなんて甘く見られたものだと思うけど。こちとら風紀委員長としての仕事の傍ら、市内のゴミ掃除してた事もあるんだからな。

「龍馬。星野龍馬だ」

「リュウマ？　どこの国の人間だ」

「日本、って言って分かるか？」

「知らん」

だろうね。俺もそんな気がしたよ。

「それでリュウマとやら。ここで一体何をしている」

さて、困った事になりました。仮にここで「異世界から来て途方に暮れてました」って言ってみろ。俺だったら精神科を紹介する。

もしくは脳外科。何か重大な障害があることを疑ったほうがいい。

けど、俺は建前を言うことには自信がある。伊達に中学一年から生徒会長をやってはいない。

「西から旅をしてきたところだ。この辺りはモンスターが少ないから短い休憩を取っていた、それだけのことだ」

「そんな軽装備でか？」

「軽装備に見えるかもしれないけど、これはオリハルコンを繊維化して編みこんだ特殊素材だ。熱にも強く、どんな衝撃にも耐えられる特別製だからな」

まあ、実際はただのジャージなんだけど。だって部活帰りだったし。

けど、俺の『空想を現実に変える力』によって本当にそのぐらいの強度にはなってる（はず）。試してないから分からないけど。

「そのおりはるこんというのは何なんだ？」

「……おおぅ」

そこからか。そこからなのか。

「えっと……アダマンタイトは分かるか？」

「知らん」

「ピュアクリスタルは？」

「さっぱりだ」

「じゃあ……ＮＷＳ超硬合金は？」

「なんなのだ？　そのえぬだぶゆーえすちょうこうごうきんというのは」

すいません、手詰まりです。

異世界……ここまで大変なのかよ……。

「……世界で一番硬い金属。これで分かるか？」

「ゼノグライト鋼のようなものか？」

ゼノグライト？　それがこの世界で一番硬い金属なのか？

「ところで、聞きたい事があるのだが」

「あ？」

「お前、種族はなんだ？」

「種族？」

言われてから周りを見渡してみる。俺の記憶が正しいならここにいるのは、ハーフリング、ドワーフ、エルフ、魔族、獣人族、竜人族など。

そして俺の目に間違いがなければ、人間――つまりヒューマンがいない。

ついでに、俺は今何も被り物をしていない。何かを被っていれば『空想を現実に変える力』で耳に何かを生やすことも可能だっただろうけど、今となっては既に不可能だ。

……とりあえず、腹を括ろう。

「人間。ヒューマンだ」

そう言った途端、辺りが騒然となった。

「……ヒューマンだってよ」「……本当かよ」「……俺見るの始めてだぜ」「……誰だってそうだろ」「……本当に目、黒いんだな」「……すげえ……」

「全員静まれ」

一番前の白騎士がそう言うと、本当に訓練された軍隊のようにピシッと空気が張り詰めた。

「それともう一つ。レグル・ファルマを討伐したのはお前か？」

「レグル……なんだって？」

「レグル・ファルマだ。翼竜の一種で特殊なブレスこそ吐かないものの、討伐には数十人がかりで一週間以上かかる厄介なモンスターだ」

それってさっき俺がぶった切ったドラゴンの事か？

「多分そう。向こうに一本だけ木が生えてるけど、それに残った魔力とか調べれば分かると思う」

白騎士（いい加減名前教えて欲しい）は神妙な顔で何かを思案するようにしながら俺を見る。

……そんなに見られると、思わずこう言いたくなる。

「いつまでガンつけてんだコラ。シバキ倒されてぇのか、ああ？」

おもっくそチンピラのセリフだが、俺は頭が良くて運動が出来て

人望あって女子にモテても、基本は不良なのだ。不良でオタクで完璧人間なのだ。この世の理不尽に服を着せて歩かせたら俺という人間が出来上がるといっても過言じゃない。

ちなみにこれを聞いた白騎士は、

「……（ポカン）」

口を大きく開けてアホ面を晒していた。

その後、なぜか俺は街まで連行される事になった。意味分からん。

迷ったらとりあえず進め（後書き）

元ネタ。
うえきの法則ｅｔｃ．．．

テンプレなんて糞食らえ（前書き）

主人公は最初からチートです。チートという言葉を百二十乗ぐらいしたのがこの物語の主人公です。
ちなみに、基本スペックまでもがチートで、空想を現実に変える力が無くともチートな能力（重力系の能力）を使えるようなとんでも人間です。

テンプレなんて糞食らえ

前回までのあらすじ。

俺、星野龍馬は神様の手によって異世界に送られた。その際に空想を現実に変える力というとても便利な能力を貰ったが、その世界に行くことに関して何も説明をされなかった上に冒険の手引書も何も無い状態だったのでとりあえず東に向かうことにした。

その途中でレグル・ファルマという翼竜にエンカウントし、神様に貰った空想を現実に変える力を使って見事に撃退した。

その数分後に、なにやらどこぞの国の騎士団らしき人たちに囲まれ、少しの間問答をする破目に。

そんで、なぜか街まで連行されるという状況説明を激しく求めたい状況に。

以上が前回までのあらすじ。

◇

それから体内時計で三時間と二十四分。俺は東の街、フィグレラルというところの王城みたいな所にいた。

ここまでの経緯は面倒なので省くが、人間を発見→城に連絡→なんかおてんばな王女様が連れて来いと命令→騎士団は危険だからという理由で咎める→王族命令だということで仕方なしに連れて行くことに→現状。

こんな感じだ。

今俺がいるのは謁見の間というところで、広さは俺の部屋が八畳だから、それが二十五個ぐらい入るような広さだ。

部屋の奥には玉座が二つ。内一つは空いているが、もう一つには俺より二つか三つぐらい年下に見える金髪の可愛い女の子がドレスを着て座っている。恐らくアレが姫様なのだろう。

大きなお友達だったら即座にお持ち帰りしたくなるような外見だが（俺も若干持ち帰りたくなったが）山田と同じ匂いを感じるため即座に却下。

種族は見た感じだとエルフ。ただ、普通のエルフだと王族にはなれないみたいなテンプレ的設定があるとすれば、あれはおそらくハイエルフだろう。実際に見るのは初めてだが、ここに来るまでに獣人やら竜人やら、ハーフリングにドワーフ、スプリガンにウンディーネ、その他数多くの種族を見てきているためそこまでの驚きはない。

それ以外にも、さっきの白騎士を始めとした、所謂隊長クラスの人達が一堂に会している。完全な騎士タイプが四人、魔法使いタイプが三人、スカウトタイプの人が二人、神官のような人が二人、なんか見るからにやばそうな人が一人いる。

てか、あれはギルティ・ギアに出てきたテスタメントというキャラクターに一番近いような……というか、本人のような気がする。敢えて言及はしないが。

それ以外にも、天井裏や床下、部屋の外や壁の向こう側に無数の人の気配が。俺が何か妙なまねをしたら速攻で拘束しようとしている空気が伝わってくる。

まあ、セキュリティが甘いな。

だってさ、これだけの数がいて、みんなして俺の動向を窺ってるのに。

誰一人として俺の実体を見て無いんだから。

俺の実体は今、姫様の後ろにいる。そして、騎士団の方々が見ている俺は、この部屋に入る前に俺が作り出した幻影。

そしてその幻影は、扉の前――つまり、謁見の間の中で最も玉座から離れた位置にあるのだ。

虚空を見つめたまま一切の反応を見せない俺に疑心感を抱いている人もいるみたいだが、王女の手前行動を起こせないみたいだ。

まったく、この国の管理体制は一体どうなってるんだか。

まあ、そろそろネタ晴らしでもしてあげようかね。

俺は空想を現実に変える力で、手の中に一本のナイフを作り出す。そしてそのナイフを、王女様の喉元に突きつけて、

「はーい、みなさんちゅうもーく」

そう言った。そして、その瞬間に全員の意識がようやくこっちに向く。

「まったく、これだけの数がいながら誰一人として俺の動向に気付けないなんて、俺が本当にどこかの国から姫様を殺すためにここにきた暗殺者だったら今頃この姫様は死んじゃってるよ？」

そう言いながら、俺は姫様の首にナイフを押し付けるマネをする。そこでようやく騎士の格好をした一人が、

「貴様！　それ以上動いたら一瞬の間を与えることなく貴様を始末してやる！」

そう、いきり立った声で叫んだ。

それに感応したように、部屋にいた全ての人間が俺に対して殺気を向けてくる。全員武器を構えて俺が動いた瞬間に何かをしようとする空気が伝わってくるが、こいつらは本当にその程度の同行で俺をどうにかできると思っているのだろうか？

……思ってるんだろうなぁ。まったく、困ったものだ。

だが、どういうわけか姫様だけは、怯えるでもなく泣き出すでもなく、ただ単にこの状況を楽しんでいるかのように微かな笑みを漏らした。その声は本当に小さなもので、周りの連中には聞こえなかったらしい。

とりあえず、勘違いしている連中に、俺とこいつらの力の差でも見せ付けてやろうか。

俺はそう思い立つと、姫様の首にナイフを当てたまま、

「俺をどうするかはあんたら次第だけどさ、そんな悠長なこととしてるとそこの魔法使いみたいに一瞬にして倒されることになるけど」

「あ！？　そんなハッタリに俺らが動じるとでも――」

騎士の一人がそう叫んだのとほぼ同時に、連中の後ろの方から「ドサッ」と何かが倒れる音がした。それに姫様以外の全員が反応して後ろを向く。すると、

水色のローブを着込んだ魔法使いが一人、白目を向いて泡を吹きながら倒れていくシーンがそこにはあった。

何をしたかって言うと、まあ、アレだ。覇気を使って特定の人間だけ気絶させるって言う、非道技だ。

狙って出来るものじゃないが、そこはまあ、俺の力を使って。

「で？　そんなハッタリがどうしたって？」

自分なりにとてもいいと思う顔で連中に微笑みかける。それだけでその場にいる全員の表情が凍りつくが、姫様だけは剛毅なもので唐突に笑い出した。

「なっ、姫様！？」

「貴様！　姫様に何をした！」

いや、何もしてないです。しいて言うなら普通の人なら精神が錯乱するような行為を普通にしたけど、この姫様は何も動じてなかったからね。

ようやく笑い終わった姫様は、目尻の涙を拭うと騎士団の連中を見渡して、

「静まれ馬鹿共」

そう言った。いや、馬鹿共って、それが一国の姫君のセリフか？

「お前らはこいつに敵意が無いことすら見抜けんのか？　それでも王国魔導騎士団か、この馬鹿共が」

なんでもいいけどこの姫様口悪いな。それが一国の（ｒｙ

「ですが姫様！　この者は姫様に刃を――」

「だぁかぁらぁ、お前らはこいつに敵意が無いことすら分からんのかとゆうとるんやこのゴミどもが。いてこますぞワレ」

みなさーん！　この姫様途中から博多弁になって、その直後に関西弁に変わりましたよー！　キャラ定まってないですよー！

……こういうキャラクターが真っ先にメインキャラクターになるんだよなあ。嫌だなあ。こんな口の悪い姫様。

これは真っ先に逃げた方がいい気がする。俺のシックスセンス（笑）が告げている。この姫様に関わっちゃいけない。

というわけで、はいさいならー。

「して、お前はどこに行くつもりだ？」

逃げられなかったー。この姫様、勘超鋭いよ。何なのこの人。俺の幻影すら一瞬にして見破ってたし。

まあ、適当な理由つけて退散するとしますか。長居は無用だぜ！

「あれだ。危篤状態の妹が家で俺が御飯作るの待ってるから」

「お前の妹は危篤状態であっても食欲旺盛なのだな」

「じゃなくて、近所の家の犬が逃げ出して」

「そんなものは飼い主に任せておけばいいだろう」

「それはそれとして、今から生徒会の用事があるから」

「お前は今、西から旅をしてきた冒険者ではなかったのか？」

……。

駄目だった。俺の語彙センスじゃこれ以上の言い訳は無理だ。

「それで？　結局お前はどこに行くつもりだったのだ？」

「くっ……」

「なんだ？　そんなに熱い眼差しで見つめられると、濡れてきてしまうではないか」

「少しは自重しろこの馬鹿姫！　子供もいるんだぞ！」

現状、部屋の中には騎士団以外の影は無いが、部屋の外にはいくつか子供のものらしき気配もある。

「貴様！　姫様に向かって馬鹿だと！？　何様のつもりだ！」

「ああもう面倒くせぇな！　お前もお前で一々会話に割り込んでく

んな！　そこの魔法使いと同じ目に合わされたくなかったら大人しくしてろ！」

そう叫びながら俺は右手に魔力を集中させる。すると、部屋にいた連中どころか部屋の外の連中まですくみあがったのが分かった。

「ちなみに、俺は一瞬にしてこの星の半分を消し去るような魔法も持ってるからな。妙な動き見せたらこの国丸ごと消し去ってやるからな」

実際、俺は空想を現実に変える力で自分の体を結構いじくった。目は、全ての魔術構成を解析する『複写眼（アルファ・スティグマ）』に変え、脳の構造はそのままに少し弄って、どんな国の言語も解析できるようにした。体は実体を保ったまま膨大な魔力の貯蔵庫に変え、一瞬にして凄まじい攻撃力の魔法まで使えるようになっている。

……順調に人間から外れているようだが、そのあたりは気にしないことにしよう。

すると、一人だけ冷静な姫様がゆっくりと立ち上がって、

「とりあえず、お前らは落ち着いて全員武器を納めろ。玉座の前でそのような行い、私の機嫌が良い時で無い限り懲罰ものだぞ？」

姫様がそう言うと、騎士団は渋々といった様子で武器を収め、壁の近くに立つとそのまま微動だにしなくなった。

「まったく、あいつらは……。……さて、話が大分逸れたどころか一切本題に入っていなかったが。

私の名はアリシア・エル・ディスバインド。このディスバインド王国第三王女で、このフィグレラルの主だ」
「ああ、そう。俺は星野龍馬。日本出身の十七歳。学生だ」
「そうか。して、お前はこの国に何の用で立ち寄ったのだ？」
「いや、草原歩いてたらそこの白騎士に連行されただけなんだけど……」

っていうか、俺がここにいる理由の一つは、この姫様が自分のところに連れて濃いって言ったからだった気がするんだけど。

「ん？　バルド、お前まだ自己紹介してなかったのか？」
「すっかり忘れていました」
「まったく、仕方の無い奴だ」
「「はっはっはっはっは」」

……。

……帰っていいっすか？　帰るところないけど、帰っていいっすか？

「私の名はバルド・ウォングレイ。王国魔導騎士団第四部隊の隊長で、姫の護衛を主な生業としている」
「はあ。ご丁寧にどうも」

あんまり興味ないけど。ここを拠点にするとも決めてないし。

「して、リュウマとやら。お前、行く当てはあるのか？」

はい、なんか展開読めるよ。これ、テンプレ的な流れだよね？
行く当てが無いならここで自分の部下になれ的なアレだよね？

「行く当てが無いのなら、ここで私のために働かんか？」

はい、テンプレ来ましたー。

まあ、行く当ても無いし……。

「そういうのもいいかもな……」

「なら――」

「だが断る」

だって、俺にメリット無さそうだし。

ほら、他の奴だって絶対反対――

「「「「「……」」」」」

うぉいっ！？　どうした騎士団！　そこはここぞとばかりに反対するシーンだろ！　自分の役割果たせよカスども！

「ああんっ！？　誰がカスだって！？」

「そこに反応すんなよ！　しかも俺の心読むなよ！」

興醒めだよ！　なんなんだよこいつら！　流れに従えよ！

もうこの場にいるのが嫌になってきた。帰りたい。もうホームシックだよ畜生。

本気でこの場から逃げようと画策していると、それを読み取ったのか姫様が口を開いた。

「今すぐ決めろとは言わない。下に部屋を用意してやるから、今日はそこで休むといい」

……なにその待遇。何かありそうでとても怖いんだけど。

まあ、好意は受け取っておくか。

「バルド、リュウマを部屋に案内してやれ」

「了解です、姫様」

「他の者は、分隊の隊長を除いて全員解散。隊長格は一時間後に再びここに集まるように。以上」

その場は、それでお開きになった。

思えば、この時点で逃げ出してれば楽だったのかもしれない。

テンプレなんて糞食らえ（後書き）

元ネタ

複写眼　伝勇伝の主人公が持ってる若干反則気味の魔眼。

覇気　某海賊漫画に出演する方々が使う気功術の最強版。

初めての契約

それから二時間ほど経った夕方のこと。俺は客室にあったベッドに横たわり、目前に広がる大問題に直面していた。

『……（じーっ）』

「……ぐぅ」

扉の隙間からこっちの様子を窺う視線、およそ十六。敵意こそ無さそうだが、興味津々な様子はこれでもかというぐらいに伝わってくる。

この状況が客室に通されてから一時間以上続くと、いい加減精神的にも参ってくる。とはいえ、さっき体を弄ったせいでいつも自分の部屋でやっているストレス発散法をやると、この城が一瞬にして瓦解する可能性があるためそれもできない。こんなことになるならもう少し考えてやればよかった。

ん？　俺のストレス発散法？　俺の部屋は防音が完璧だから全力で歌うことなんだけど。なんかこの世界で全力熱唱すると、アカムトルムのバインドボイスみたいな感じになりそうだからあんまりやれそうにないんだよな。

あとは……そこら辺にあるものを適当に殴るぐらいだけど、残念ながらそれも却下だ。

さっきここに来るまでに何度かモンスターにエンカウントしたため、最初はどのぐらいの加減でやればいいかよく分からなかったから、とりあえず最初に出てきたオークみたいなのを全力でぶん殴っ

てみた。

すると、そのオークは血や体液を飛び散らせながら数百メートル一気に吹き飛び、着地点から五百メートルぐらいごろごろと転がっていった。

近寄ってみると、そこには原形を留めていない肉の塊が、摩擦熱のせいで表面が黒焦げになった状態で鎮座していた。

それから、俺は再びエンカウントしたモンスターを、最初から使える超能力みたいな反則技を使って地面に（文字通り）沈めてきた。どうやら、俺はこの世界では最早最強といっても過言ではないほどの力を手に入れているらしい。

まあ、そんなことはどうでもよくて。

今はあの連中をどうにかするのが先だろう。

「よっこらせっと」

俺はベッドから跳ねるようにして飛び降り、扉のほうへ向かう。すると、こっちを覗いていた奴らが全員四方八方へと散らばっていくのが感じ取れた。

全員いなくなったのを確認して、俺はカバンの中から四枚の紙を取り出した。

日本神道に古くから伝わる恐王の呪符というもので、これによって作り出された結界はありとあらゆる動植物を拒むようになる、所謂人払いの結界を作り出す。

それを部屋の四隅に貼り付けて、指の先を少し切って血を出し、それを呪符に塗りつける。それだけで結界が作用し、人払いの効果で誰もここに近寄ろうとはしなくなる。

ようやく静かになったから一息つく。と、途端に腹の虫が騒ぎ出した。

俺がこの世界に来たのは四時間半ぐらい前。地球からおさらばしたのは、部活が終わって家に帰る途中だったから五時半ぐらい。

つまり、俺の体内時計は地球で言うところの午後十時。

腹も減るわけだ。

俺は空想を現実に変える力で自分の意思で開閉が出来る亜空間を作り出し、その中に貴重品や荷物等を突っ込んで、さらに能力で作り出した真っ黒なローブに身を包んで部屋を出た。

◇

厨房は下のほうにあるだろうという安直な考えから、城の螺旋階段を使って下に降りていると、そこでなにやら奇妙なものとエンカウントした。

外見的には人間と変わらない、俺と同じ歳か少し年下ぐらいの女の子がいた。

まあ、それはいい。というか、それだけだったら俺は『なにやら奇妙なもの』なんて言い方はしない。

何が奇妙かというと、その子、

――腰から下が無いのだ。

「……幽霊？」
「……ん？」

俺の呟きが聞こえたのか、その子はゆっくりと俺の方を向いた。
そして、彼女の蒼い瞳と目が合う。

少しの沈黙。城の外では兵士たちが訓練をしているのか、遠くから威勢のいい掛け声が聞こえてくる。

この世界では丁度夕陽が沈むぐらいの時間帯のようで、山の陰に沈んでいく夕日が俺たちの影を伸ばす。

何か声をかけようと思って口を開くと、彼女はそれを遮るように先に言葉を発した。

「……お前、私が見えるのか？」
「……うーむ。見えるっちゃ見えるな」

彼女の質問にそんな煮え切らない返事をする。実際、幽霊を見て、それに話しかけられるなんて経験普通の人間はしない。

……あ、この世界人間いないんだっけ。
「そうか……私が見えるのか……」
「……（ゾクッ）」
何か嫌な予感がする。俺のシックスセンス（笑）が告げている。このままここにいたら確実に面倒事に巻き込まれると。
「待て」
おい、この世界の女って勘鋭すぎないか？　なんで少し重心を後ろにずらしただけで俺が動こうとしたのが分かるんだよ。
ってか、おい。
ちょっと待て。なんだこれ。
「無理に動かないほうがいいぞ。動こうとすると少しずつ精気が吸い取られる呪いを掛けたからな」
そんなもの、いつの間に……。気配すら感じなかったのに……。
まあ、いつまでもこんなものに囚われているような俺じゃない。というか、こんなもので俺をどうにかできると思っているのだろうか。
「いや、思ってはいない」
「心を読むな」
てか、どうにかできると思ってないならわざわざ俺に呪いなんて

掛けるな。

「実は、お前に折り入って頼みがあるのだ」

「断る」

「……まだ何も言っておらんだろう」

「言わなくても分かる。どうせ、お前は何かの精霊で、宿主のいない今の状態だと自分の力はかなり弱いから、俺に寄生して精気を分けてもらう代わりに俺の力になるとか、どうせそういう話だろ？」

「察しがいいな。そのとおりだ」

こんな状況で褒められても何も嬉しくねえ。

「私は風の精霊、ソルフェールという。六元素精霊のうちの一つで、つい最近目覚めたばかりだ」

「……これ、俺も自分の名前言わないと駄目なパターン？」

「言わなくてもいいが、お前の頭の中を勝手に覗くことになるぞ。それでもいいなら――」

「俺の名前は龍馬。ついさっきこの世界に召喚されたばかりの人間だ」

……召喚でいいのか？　……いいのか。

どうでもいいが、目の前の精霊（仮）が「そこまでペースを握られるのが嫌なのか……」と落胆しているのは何故だ？

「まあいい。お前、私と契約する気は無いか？」

「して俺に何のメリットがある？」

「私はこれでも精霊だからな。街を歩くだけで他の魔法使いたちから崇められ、風属性の魔法に関しては世界最強クラス、体に風を纏って空を飛ぶようなことも出来るようになるぞ」

ほう。それはなかなか便利そうだな。最初の二つは置いといて。
「どうだ？　私と契約する気になったか？」
おい、なに嬉々とした目でこっち見てんだよ。それでも精霊か。
「私はこれでもまともな方だぞ。イフリートやシヴァに比べたら穏やかなものだ」
「……それ、火の精霊と氷の精霊だよな」
「おお、よく分かったな。そうだ。奴らに比べたら私は至って普通の人格を形成している自信があるぞ」
風の精霊がこの調子だと、他の奴らは……。
「なあ、お前と契約すると他の精霊と契約できなくなるとか言う制約ある？」
「む？　あるにはあるが、そもそも二体以上の精霊と契約をしようなどという輩はこの世界には存在せん。仮に契約したとしても、精霊が持つ圧倒的な魔力に飲み込まれて魔物と化すか、体から溢れる魔力を制御できずに死ぬかのどちらかだろう」
「今までにそういう状態になった精霊はいるのか？」
「私の知っている限りでは、イフリートとトールの二体が同じ宿主を持ったことがあるらしい。まあ、あの時起きたことによって、私たちの間で『他の精霊が付いている宿主とは契約しないようにしよう』という制約が結ばれたのだ」
つまり、二体以上の精霊と契約することは出来ないわけで、こいつが割とまともな性格であるとすれば、他の奴らは多少なりともぶっ飛んでいる可能性が高いわけで。

いや、まず間違いなくイフリートは熱血タイプだろうし、シヴァは冷徹。雷はとことん喧しい可能性が高く、水は掴み所がなくて、土はとことん頑固……。

「お前と契約してやる」

「ん？　何がお前をそこまで駆り立てる？」

「気にすんな」

そんな面倒な奴らと契約するぐらいならこいつでいいだろ（妥協）。

ちなみに、俺は最初から何かしらの精霊と契約するつもりだったのはここだけの話だ。

「で、契約ってのはどうすんだ？」

俺がそう聞くと、ソルフェールは俺の近くに小さな魔法陣を作り出した。

「それに血を一滴垂らせ。それで私との契約は完了する」

そう言われ、俺はさっき恐王の呪符で結界を作るときに切った人差し指を再び切る。すると、そこから一筋の血が流れ出した。

魔法陣の中心に血を垂らすと、俺の体を強い風が取り巻き、あまりの強さに目が開けていられなくなる。それと同時に、体から少し力が抜けて若干立ちくらみのような現象が起きるが、すぐに調子は戻った。

風が収まってゆっくりと目を開くと、目の前に妖艶な姿を持った、俺より十歳ぐらい年上の姿になったソルフェールがそこに立っていた。

「これで契約は完了だ」
「それがお前の本当の姿か？」
「ああ。――しかし、お前の精気は純度が高いな。普通はこの姿に戻るまでに一年以上の月日が必要なのだが、契約した瞬間にこれとは」

そこらへんも、人間ってことが関係してるんだろうか。

「俺とお前を繋ぐ線（コード）みたいなのはあるのか？」
「右手を」

ソルフェールに指差されて右手の甲を見ると、そこには紋章のようなものが刻まれていた。

「それは風の刻印（スティグマ）。私とお前の契約の証だ」
「これがな――」

なんか、ボクらの太陽に出てきた風の紋章みたいだ。というか、まんまそれだろ。敢えて言及はしないが。

「それと、この刻印があれば念じるだけで風の障壁を呼び出すことが出来る。防御にはかなり役に立つぞ」
「それ以外には？」
「特に無い。しいて言えば、風属性の魔法を使うときに詠唱が必要なくなるぐらいだ」
「そっちのほうが重要だろ！」

なんか、もう疲れた。

「で、お前はこの先、俺が呼べば出てくるのか？」

「ああ。私はお前の僕だからな。お前が望むのなら私はお前のためになんでもしてやろう」

何その無駄な忠誠心。別にいらねえんだけど。

まあ、俺の僕だって言うなら一つだけ言いたいことがある。

「俺のことは「マスター」って呼べ。それと敬語」

こういうのは最初に主導権を握らせず、超上から目線でペースを握ることが重要だ。

もちろん、飴と鞭を使って。

「マスター、か」

「別に大変なことじゃないだろ？　お前もこの世界にない名前を呼ぶより、そういう親しみやすい呼び方のほうが楽だろ」

この世界に日本語形の発音は多分ない。というか、魔法が普通にあるような世界なら、基本的に少数民族で使われている言葉以外は公用語のはずだ。

「確かにその呼び方のほうが楽だな。よし、私はお前のことをマスターと呼ぶことにしよう」

「ああ。ところで、俺との契約においてお前が俺から吸う精気はどのくらいの量だ？」

「私がマスターと契約を交わした時に吸い取った精気の量とほぼ同量になります」

契約を交わした時？　それって、あの立ちくらみみたいなやつか？

それはそれとして、年上の美人系の女が俺に敬語を使っているという状況は、それはそれとして――萌える。

「マスターの精気の量は他の者に比べてかなり多量になるため、普通の人なら体調不良を引き起こすレベルの量を吸っても大丈夫だということが分かりました。ですので、今後はあれぐらいの量を一日ごとに吸わせていただきます」

「分かった。もう引っ込んでいいぞ」

「了解しました。それとマスター」

「ん？」

「先程精気を吸った時に感じたのですが、マスターは今空腹ではないのですか？」

そう言われて思い出す。

そう言えば、腹が減ったから厨房を探して出歩いてたんだっけ。

「きちんと食事は摂って下さい。私の食事の質にも関係しますので」

ソルフェールはそう言うと、跡形もなく消えた。俺の中にいるのはなんとなく理解できるが、どこにいるかと聞かれるとかなり曖昧だ。

「……なんか釈然としないな」

その後、俺が厨房に辿り着くまでに三十分の時間を要した。

命は儚くとも尽きるのは一瞬

夕飯を食い終わって数分。なんとなく手持ち無沙汰になって、俺は城の中を探検していた。

食事の内容は如何ともしがたいものだったが、まあ、地球では絶対に見ることの無いものが沢山出てきた。なんか、ふにゃふにゃした感触の、見た目は鶏肉なんだけど味はホルモンとマグロと舞茸を足して三で割った後に四乗して円周率で割ったような味のするベランナとかいう家庭料理から始まり、どこからどう見てもでかい蜘蛛を油で揚げたようにしか見えないとんでもないゲテモノ料理や、やったら甘い麦飯のようなものが出てきて、なんというか、カルチャーショックを受けた。

俺が元いた世界とは違うんだから多少の文化の違いはあると思っていたが、まさかここまで違いがあるとは思っていなかった。ここでの食生活に慣れるのはかなり大変そうだが、元の世界に戻れる保証は全く無いため慣れるしかない。

まあ、蜂の子とか蠍の素揚げや食用ミミズやゲンゴロウぐらいなら俺は食える。というか、地球にいた頃は、例え俺以外の人間が全て死滅してもゴキブリを食ってでも生き延びる自信があった。

だから、並大抵のことではくたばらないとは思うけど……それでも心配だ。

「おっと」

考え事をしながら歩いていると、足に何かが当たって若干よろけ

る、が、すぐに体勢を立て直す。

「一体なんだ？」

そう呟きながら後ろを振り返る。するとそこには、

「ふみゅぅ……」

「……」

……なんか、くたばってる銀色の髪の、幼少形態のソルフェールと同じぐらいの年頃の女の子のようなものが。

……よし、見なかったことにしよう。ただでさえ厄介事に巻き込まれてる感じがするのに、これ以上厄介事に巻き込まれるのは御免だ。

そう思って、元々進もうとしていた方角に足を向ける。すると、

ぐぎゅるるるるる。

「……」

……無視だ。今のは空耳。俺は何も聞いていない。気のせいだ。

ぐぎゅるるるるる。

「ふみゅぅ……」

「……くそ」

こういうときだけやたら御人好しな俺のことが嫌いだ。自分じゃ

どうしようもないからいつも放ってるけど、いい加減治すことを検討する余地がある。

「……おい、しっかりしろ」

「……あ……すみません……」

なんてか細い声だ。今にも命の灯火が消える寸前の奴みたいだ。

俺はその子をゆっくりと抱き起こして、とりあえず近くにあった部屋の中に連れ込む。このまま廊下に放置しておいたら限りなく邪魔だ。

「……すみません……ご迷惑をお掛けして……」

「そう思うならこれでも食ってろ」

俺はそう言いながら、学校のカバンの中に常に常備してあったカロリーメイトを亜空間から引っ張り出して女の子の口に突っ込む。多少表現がアレだが、んなこと一々気にしてるのは面倒だ。

その子はゆっくりと咀嚼していたが、カロリーメイトを飲み込むと開口一番にこう言った。

「……すみません……そっちでお腹が減っていたわけじゃないんです……」

「は？」

じゃあなんでこんなげっそりしてんだ？

「実は……血が足りなくて……」

「……お前、もしかしなくても吸血族（ヴァンパイア）か？」

「はい……それで……もう三日も血を飲んでなくて……」

……こいつは厄介事の匂いがプンプンしやがりますぜ旦那。

「血には人それぞれ属性の違いがあって……自分の血と属性の違う血を飲むといろいろと厄介で……私の属性と合う人ってなかなかいなくて……」

「それでここで行き倒れてたってわけか」

「……お恥ずかしい限りです……」

魔族の血液にはそれぞれ属性ってのがあるのか……。人間にとってのA型やB型みたいなものか？

「お前の血は何属性なんだ？　一応探してやる」

「あ……光属性です……」

吸血族って普通闇じゃないのか？　RPGの話か、それは。

『ちなみにマスターの血液は光属性です』

「要らん気を回すなソルフェール。おかげで早速探す手間が省けちまったじゃねえか畜生」

……すっげえ気乗りしないけど、ここで見殺しにして殺すのも可哀想だよな。

「……だったら俺の血を飲め。俺のも光属性らしいから」

「え……いいんですか……」

「いいって言ってんだろ。俺の気が変わらないうちにさっさとしろ」

俺はそう言って彼女に背を向け、ローブのフードを外して自分の

首元を晒す。吸血族が血を吸うのはここが一番ポピュラーらしいから、別に構わないだろ。

……念のために、自分の体を『十五分間に七回殺されないと死なない体』に変えとこ。万が一血の飲みすぎで殺されちゃ敵わん。

「じゃあ……いただきます……」

そう言って彼女は俺の首筋に力なく噛み付く。牙が肉に食い込んで若干痛いが、感覚的には猫に甘噛みされながら献血用の針で血を抜かれている感じだ。

「こくっ……こくっ……」

「……」

「んふぅっ……こくっ……こくっ……」

……なんか、飲んでいる最中に時折聞こえる息継ぎの声が若干エロい。それに、息が鎖骨の辺りに当たって少しこそばゆい。

「……」

……そろそろ、ヤバイ、かな？

「な、なあ、そろそろ放してくれないか？」

「んっ……こくっ……こくっ……」

……。

……いや、もうホントいい加減ヤバイんだけど。絶対一リットル以上飲まれてるんだけどこれ。

血の抜けすぎで頭がぐらつき始め、目の前が霞んでくる。……あ、もう駄目だこれ。

そう知覚した途端に一瞬意識が飛び、その直後に体中の血液が再生を始める。つまり、これで一回死んだことになる。

（……なんか、順調に人間から遠ざかってるな。これじゃ、俺って魔人じゃね？）

とか考えていると、ようやく満足したのかその子は俺の首を解放してくれた。危なかった。あのまま際限なく飲まれてたら確実に十五分持たなかった。

「満足してくれた？」

「は……はい……」

顔も赤みが戻り、肌も健康的な色に戻っている。代償として俺は一回死んだが、まあ、些細なことだろう。

「あの、ありがとうございました。私、王国魔導騎士団第四部隊の中の第一小隊所属のレイア・ニストルって言います。あなたは……たしか隊長が連れてきた方ですよね？　見ず知らずの私を助けていただき、ありがとうございました」

そう言ってレイアは頭を下げる。レイアって言うと、どうしてもリオレイアが頭の中に出て来るんだが……。

隊長――ってことは、この子はバルドの部下か。あんまり強そうに見えないけど、こんなんでも騎士にはなれるのか。緩い国だな。

「あの……ここまでしておいてもらって厚かましいのは分かっているんですが、一つお願いが……」
「断固拒否する」

この子が言いたいことはなんとなく分かる。だからこそ、俺は拒否する。というか、もう拒絶する。

するとレイアは、「まだ何も言って無いのに……」といいたげな顔をした。言わなくても分かるから遮ったんだよ。分かれ。

「あの……話だけでも聞いてもらえませんか……？」
「嫌だ。用が済んだから俺はもう行く。君助けたのはただの気まぐれだ。もう俺に期待すんな」

矢継ぎ早に言いたいことを言って俺は背を向ける。はっきり言ってこれ以上の厄介事は勘弁だ。

「お願いします……話だけでも聞いてください……」
「……」

……。

……ったく、こういう時に俺の御人好しな性格が本当に嫌いになる。

ってか、んな泣きそうな顔すんな。……くそ、何で俺が罪悪感を感じにゃならんのだ。こちとら助けた側だぞ。

「……分かったから、んな泣きそうな顔すんな。言っとくけど、聞

くだけだからな」
「は、はい！」
そう言うと、レイアは花が満開に咲いたような可憐な笑みを浮かべた。
「その……私が吸血族なのはさっき言ったじゃないですか。それで、定期的に血を飲まないと私は飢餓で死んでしまうんですけど、私と同じ属性の血を持った人ってなかなかいなくて……。だから、あなたに血を分けてもらえたらな――って思いまして」
「なんだ、そんなことか」
意外と単純なことだったから少し脱力。するとレイアは嬉しそうな顔で、
「いいんですか！？」
「断固拒否する！」
話聞くだけって言っただろうが。それ以上を俺に期待すんじゃねー。
「えぇ……そんなぁ……」
んな涙目になったって俺の気持ちは揺るがんぞ。いくら俺が御人好しだからって、言えばなんでもやってくれると思ったら大間違いだぞ。
『マスター、少しいいですか？』
「なんだソルフェール」
『上のほうで数人がマスターを探しているようです。一度部屋にお

戻りになられてはいかがでしょうか？』

「そうか、分かった」

そう言えば人払いの結界張ったままだったな。あのままじゃ部屋にも入れないだろうし、というか部屋にすら近づけないだろうしな。術者以外は結界が張られていることにすら気がつかない仕様に術式自体を変えたし、ちょっとした騒ぎになっていると考えたほうがいいかもしれない。

「んじゃ、俺はもう行くから」

俺はそう言ってさっさと背中を向けて歩き出す。

……やっぱり、さっさとこの国を出たほうが楽かもしれないな。よし、そうと決まったら早速実行。

右手の刻印に魔力を集中させて風を生み出し、上空に向かって凄まじい上昇気流を作り出す。その気流で体を浮かせて、一気にもといた階まで登る。

この城の造りは、城の入り口から大広間や階段に向かう廊下は城内にあるが、それ以外の廊下はほとんどが中庭や吹きぬけなどに面している。だから、こうやって気流を生み出せばわざわざ階段なんて登らずとも上に行くことは可能だ。

「んじゃま、姫様のところにでも向かうとしますかね」

部屋にかけておいた結界を解いてから、俺は姫様に会うべく謁見の間へと向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1293v/

存在自体がチートな人間にチートな能力を与えるとどうなるのか

2011年11月7日11時17分発行